



薄闇に墮天



伽藍

そうして今日も、ひとは生きていく。

空と海を切り取るその真ん中で、無様に這いずり回りながらでも。

小学生の頃、私は奇跡を見た。

その時の感動は、十年経った今でも覚えている。

厚く雲に覆われた空。

風に切り裂かれた灰。

そこから光のヴェールが地に降り注ぐ、その瞬間。

あの時は知らなかったその現象の名前を、今では知っている。

それは、天使の梯子というらしい。

実は他にも色々と名称があるのだが、そんなロマンの欠片も無い名前よりは、私はこう呼ぶ事にしている。

まだ何も知らなかった幼い子供が見た、小さな小さな奇跡。

光の羅紗。

私は、大型の本屋の中、置かれた椅子に座って、買ってもいない写真集を読んでいた。

写真集は、躊躇わず買うには学生には少々敷居が高い。

まあ、他にお金を使わなければ良いだけの話なのだけれど。

「そうはいかないのが、人間ってものよね」

訳知り顔で偉そうな事を言いながら、私はページを捲る。

周囲の喧噪は、耳に遠い。

その写真が、眼に入ったのは偶然だった。

小さな頃、あの三階の音楽室の窓から見た、私だけしか知らない出来事。

思わず笑う。

いつだったか読んだ本の中で、誰かが言っていた。

奇跡なんて見たくない。

私はその意見に、大いに同意したい。なにしろあの一瞬は単なる気象現象であって、そんなご大層なものではなかったのだから。

奇跡なんて見たくない。

そんなものを見た日には、矮小な人間の眼など残らず潰れて仕舞うだろう。

だって人間なんて、思わずびっくりして仕舞う程弱々しいのだから。

耐えられない。

耐えられる筈、無い。

奇跡は決して、求めるべきものではない。

そう、私は奇跡なんて見たくない。ただ、それを信じていたいただけなのであって。

時刻は夕方だ。

大きな窓に眼を向ける。恐らく夕陽が存在しているのであろう場所は、生憎、高いビルに阻まれて見えなかった。

「ああ……」

私は思わず嘆息した。

今、この瞬間、落ちていく夕陽が見えない、その事が残念でならなかったのだ。

諦めて、私は写真集に視線を戻す。それから、少しだけ微笑んだ。

海さえ見えない、空の下。

今日も私達は、無様にのた打ち回りながら、陸の上を、生まれたての赤ん坊のように、四つん這いで歩くのだ。